

〔倭訓菜那_{前編}十九〕なし○中 梨を訓せるは奈子の音を謬用うといへど、中酸の義にてこそ、磐梨郡を倭名鈔にもいはなすとよめり、水なしは消梨也、又青なしはあり、共に賞すべし、觀音寺松尾ともによろし、堅なしは棠梨也、これらごともいふ、あまなしは加冬梨也、又島なしより、實少さく赤し、日本紀に木梨あり、今も一種とす、本草模榎の一名に見えたり、攝州に紫花梨あり、本草にも見ゆ、美濃山中に姫なしあり、形圓くてちひさし、冬に至り食べし、新撰六帖に夏梨あり、秋をもまたぬとよみたれば、夏より熟するなるべし、酉陽雜俎に曹州出夏梨と見えたり、

〔枕草子三〕木の花は

なしの花。よにすさまじくあやしき物にして、めにちかくはかなき文つけなどにせず、あいきやうおくれたる人のかほなど見ては、たとひにいふもげに其いろより玄てあいなく見ゆるを、もうこしにかぎりなき物にて、文にもつくるなるを、さりともあるやうあらんとて、せめて見れば、花びらのはしにをかしきにほひこそ心もとなくつきためれやうきひみかどの御使ひにあひてなきけるかほにせて、梨花一枝春雨をおびたりなどいひたるは、おぼろけならじとおもふに猶いみじうめでたき事はたぐひあらじとおぼえたり、

〔新撰六帖六〕なし。

年ふれどかはらずながらつれなしのあらぬ物にも身こそ成ぬれ

家良

爲家

いたづらにおふのうらなし年をへて身は數ならず成まさりつ、

〔圓珠庵雜記〕なし、ありのみ○中

事物異名云、梨阿里馬、

〔相模集〕さかりすぎてくちたるなしを、おさなき人の許にやるとて、たゞならじとて、